

竹森俊平著「ユーロ破綻 そしてドイツだけが残った」一日経プレミアシリーズ

日本経済新聞出版社 2012年10月9日刊を読む

ユーロ破綻 そしてドイツだけが残った

1. ドイツは本当にユーロの崩壊を認めるつもりなのだろうか。ソロスのスピーチは核心に迫る。
2. (1) 私の考えでは、これまでの失敗を修正し、現在の分裂に向けたプロセスを逆転させるために政策当局者に与えられた時間は約3カ月である。
(2) 政策当局者とは、具体的にはドイツ政府とドイツ連銀のことである。
(3) なぜなら、危機が勃発すれば、操縦席にいるのは債権国であり、ドイツの支援がなければいかなることも実現しないからである。
(4) しかし、ユーロはおそらく存続するだろう。
(5) なぜなら、ユーロの分裂は周辺国にとってだけではなく、ドイツにとっても、莫大な損失をもたらすからである。
(6) ドイツは周辺国に対して回収のできない巨額の債権を保持することになるのである。
(7) 多くの政府間借款に加え、ブンデス・バンクは年末にはターゲット 2 による 100 兆円を超える純資産を保持することになるのである。
(8) またドイツマルクに回帰すれば、通貨高によりドイツは輸出市場から締め出されることになるだろう。
(9) もちろん、政治的な帰結はさらに重大だ。
(10) したがって、ドイツはユーロが存続できるだけのことはするだろうが、それ以上は何もしないだろう。
(11) その結果、ユーロ圏はドイツに支配される地域となり、債権国と債務国の格差は拡大し続ける。
(12) 周辺国は恒久的な経済の低迷に沈み、常時、財政支援を必要とすることになるだろう。
(13) この結果、欧州同盟は『驚異的な目標』として、人々の想像力を掻き立てたときとは、かなり様相の異なったものになるだろう。
(14) それは『ドイツ帝国』に転化しし、周辺国は後背地に成り下がるのである。

P262 ~ 263

3. (1) 12年8月現在、ユーロ崩壊の予想が高まったことで、さすがのドイツ国民も震えあがっているので、当分の間、ドイツ政府も ECB の行動への批判は控えるだろう。
(2) しかし、介入が2年にもわたったら、どうだろうか。
(3) きっと、「トランスファー同盟…」という批判の声が、次第にドイツの側から高まってくるだろう。

- (4)もちろん、ドイツ政府も、他の政府も、この 2 年という時間を無為に過ごすわけではない。ドイツ政府は「新財政協定」の批准を早めるように、他国に圧力をかけるだろう。
- (5)その他、ソロスの言う、「ドイツ帝国」の確立のために必要な措置を、ドイツ政府は他の国を脅したり、すかしたりすることによって進めるだろう。
- (6)それで本当に「ドイツ帝国」が確立するなら、ドイツもユーロの存続のために尽力することになるだろう。

- 4. (1)すでに、ECB が 2 年間も介入を続けたことにより、ドイツの民間銀行は、ほぼ安全に外国資産を売り抜けている。
 - (2)それゆえ、ドイツが「ユーロ」に代わって、「マルク」を再導入したところで、民間銀行については評価損の心配はほとんどない。
 - (3)それを確認したところで、ドイツはユーロからの離脱のための行動をとる。
- 5. (1)「ユーロ持続」と「ユーロ崩壊」の、どちらの可能性が高いかと言えば、「崩壊」のシナリオがより現実的と思える。
 - (2)この先の 2 年間で、ユーロ圏の経済が健全化し、イタリア、スペインの財政・経済が市場の信頼を取り戻すまで正常化するとは到底、思えないからだ。
 - (3)むしろ、不況の最中に極度の緊縮財政を強行することにより、不況が深刻になり、財政状態も犠牲の割にはさほど改善しないだろう。
 - (4)そうなれば、ユーロ圏の政治的混乱はますます広まり、国民の不満が 1 点に集中する。
 - (5)現在の場合、それが何に集中するかは、ほぼ自明だ。
 - (6)格好な目標があるからだ。「ドイツ帝国」である。
- 6. (1)かくして、ユーロ圏全体に広がる政治的混乱の中でユーロ崩壊が起こるのだろうが、その前に各国は自国にあるユーロの流出を防ぐために、徹底した資本輸出の規制を実行する。
 - (2)ユーロが国外に消えるのを防ぐため、輸入障壁も設ける。
 - (3)戦後、50 年にわたり営々として続けられてきた「欧州統合」は、統合崩壊の逆バブルに巻き込まれ、欧州は閉鎖経済へと回帰を始める。
 - (4)その後、欧州はもちろん、世界経済全体が混沌に沈む。

P272 ~ 273

[コメント]

欧州の共通通貨ユーロの存立が危機に立たされ、その動向が世界経済の未来、つまり、日本経済、日本企業の存亡、日本人の生活を一変させかねない。最悪のケースに陥った場合にどうすればよいのか、最悪のケースに陥らないにしても、このような全世界的な経済危機の時代をどのように乗り切ったらよいのか。ユーロ破綻の現実を冷静な目で認識するのに竹森先生の本書は極めて有用と確信する。